

## 鎮魂シベリアに眠る父を想う

### 【昭和二十年(1945)の夏】

終戦の年、私はまだ六歳小学一年でした。連日の空襲で、夜は裏庭の防空壕で米爆撃機B29の巨体に怯えながら過ごしました。また、西空を見れば真っ赤に染まり雨の様に降る焼夷弾がキラキラと光り、たとえ様のない光景でした。これが地獄絵というものか。父の勤めていた三菱の航空機エンジン工場(東区大幸地区)が猛火に包まれ、瓦礫の山と化したのもその頃(昭和十九年十二月)でした。幼いながらも日本もお終いか、この先どうなるであろうかと不安と恐ろしさに怯えながら、生涯忘れることのできない暗い日々でした。

そして、終戦の八月十五日、暑く焼けるような日。昼に何か重大な玉音放送とかを聞かされるもよく理解できなかったが、母が日本が負けて戦争は終わったらしいという。祖父母も近所の人も、ラジオの前でおし黙って顔を伏せたままでした。でも父が満州から早く帰れるのではと、淡い期待を抱いたことも事実でした。その後の生活の苦しさは例えようもないが、生きるための食糧だけは自給が出来、子供たちは家族の一員として野良仕事の手伝いもし、飢えをしのぐことは出来ました。その後一・二年の間、戦死された人の葬儀が毎週のようにありました。祖父母も新聞・ラジオの復員者便りの中に父の名を探し続けました。やがて、ある冬の寒い日、たった一枚の公報が届き、それには父の死亡、「ソ連シベリア地区で戦病死」と。母が信じたくない気持ちも耐えられず、肩を震わせながらどっと泣き崩れる姿は何時までも忘れられず、幼いながらどれほど戦争を恨んだことが。これが少年期のトラウマでも



長久手市岩作早稲田  
松原 永吉さん



名古屋空襲 三菱の工場炎上す 岩作御嶽山付近から西を望む(想い出) スケッチ:松原 永吉

スケッチ:松原 永吉

ポタ山のある炭鉱の集落(スケッチ)  
ブカチャーチャ収容所付近  
あの忌まわしい収容所(ラーゲリ)は  
朽ち果てていた。



あったのです。葬儀を済ませてからの母は、朝から晩まで黙々と働きました。寝る前にいつもこつそりと新聞の帰国者だよりに父の名を探し続け、何時までも叶わぬ望みを棄て切れ無かったようです。その後、祖父母や皆さんの支えもあり、寂しさに耐えながら何とか少年期を過ごすことが出来ました。

### 【シベリアの墓参 平成四年(1992) 凍土に眠る父らに会う】

戦後四十七年(平成四年)旧ソ連がペレストロイカによる新政権になり、念願のシベリアの墓参の受け入れの知らせがありました。でも高齢の母がああ僻地に出かけるのはとても難しい。しかし、本人はその地に立ちこの目で確かめたい思い絶ち難く決行しました。

父たちが行先も知らされず送られたあのシベリア鉄道に揺られ二日間、抑留されたと言う寂しい炭鉱のある町に、ホテル代わりに寝台車を切離しそこで停泊しました。そこはバイカル湖の東、見渡す限りの草原で荒れた集落が散在し、その光景は五十年前のまま、時が止まったようだと言う。石炭のポタ山の向こうに父らが埋葬されたはずの丘があり、その目じるしの一本松だけが朽ちて株だけが残っていました。

### 【凍土の中から】

翌日その草むらをそっと掘ると、目をかっと見開いた骸が解けた凍土の中から語りかけた。

『いつの日かきつと故郷に帰るぞ。思えばこのシベリアに捨て

